

2020. 4. 1

畑 啓之

新しい年度のスタート 新入社員にとっては忘れられない衝撃的なスタートである

この会社に入ったら、まずはどの部署に配属になり、そこでどのような仕事をするようになるのか、さらには、その部署にはどのような人たちがいるのか。これらのことがまずは気掛かりになるものである。また、最初はできる限り自分を抑え、その組織にうまく溶け込んでいければ、と考えるものである。これが例年の新入社員の姿である。

しかし、今年は事情がかなり異なっている。職場は運命共同体となり、だれかがウイルスを持ち込むのではとの恐怖が会社全体を包んでいる。互いに助け合える職場となれるか、あるいは互いに距離を置く職場となっていくのかは、紙一枚の差である。感染者数がある数を超えてオーバーシュートの可能性がささやかれたすと、そこには疑心暗鬼の心が宿る。

そのような場合にどのような態度で先輩諸氏に接するか？ これでああなたの人間性と度量が試されるかもしれない。感染予防に関しては、まずわが身を制すること、すなわち危険地帯には近寄らないこと。ついで、職場での感染予防に極力注意を払い実際に行動に表わすこと。たとえば、朝少し早く出社し、机の上やドアノブなどを拭くこともその表れである。

人間の能力は平常時に試されることは少ない。切羽詰まって、今この仕事が出来上がらなくては明日から大きな損失が出る。あるいは、この発明がいつまでに完成しなければ、他社に負け、今までの努力が水泡に帰す。などなど、異常事態においては今まで隠れて見えていなかった才能が表出し、自分でも信じられない結果を生み出すこともある。

新入社員の時代には、今までにない自分の能力に目覚める良い機会である。多少の失敗は許されるし、給料をもらいながら諸先輩から教育も受けられる。また、ダメもと承知で提案したことを「やってみろ」と言ってもらえれば幸せだし、やらしてもらえなかったとしても、先輩たちからは「やる気のある新入社員」とみられることは間違いない。

悪者の新型コロナウイルスの恐怖を諸先輩方と共有し、その悪者をあたかも仮想敵国として、諸先輩と心の共同戦線を張り、異常な環境下ではあるが社会人のスタートとして、後から思えば有意義な一年であったと、そう思いだせる一年になるようにと祈っている。

いつもの年ならばいつもと変わらぬ新入社員の姿がそこにある。異常の年には個性の際立った新入社員がそこに浮かび上がる。